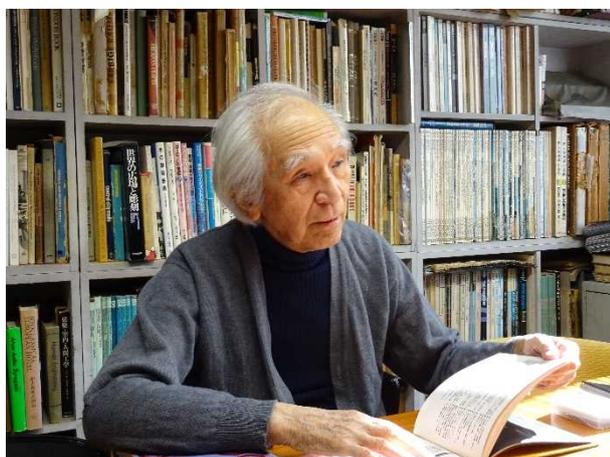


■松本哲夫氏インタビュー記録

剣持勇とデザイン行政はじまりの頃

- ・日時：2019年11月18日（月）10:30～12:00
- ・場所：剣持デザイン研究所 会議室（新宿区）
- ・出席：松本哲夫氏／青木史郎、黒田宏治

*松本哲夫：1929年生まれ。1953年千葉大学工学部建築学科卒業（第一期生）。通商産業省産業工芸試験所技官を経て1957年株式会社剣持勇デザイン研究所にチーフデザイナーとして入社、1971年に代表取締役就任、1977年に社名変更により剣持デザイン研究所代表取締役、現在に至る。建築、インテリア、家具等さまざまなデザインを手掛ける。Gマーク選定委員等を歴任。



[目次]

- 松本哲夫氏の産業工芸試験所入所の経緯
- 戦時中の工芸指導所と剣持勇
- 産工試の成形合板技術と天童木工
- デザインコミッティーとグッドデザイン
- デザイン行政のはじまりと当時のデザイン概念

【参考1】天童木工の主な流れ（1940年～50年）

【参考2】剣持勇と産業工芸試験所及びデザイン振興活動（工芸指導所入所から1960年まで）

+++++

—— 松本さんは、剣持勇さんが産業工芸試験所から独立するにあたり、剣持さんに請われて1957年に試験所を退職されています。以降、剣持勇デザイン研究所でチーフデザイナーを務め、剣持さんが亡くなられて、1971年に代表取締役に就任、今日まで約50年間同研究所の代表として、堅実

なデザインを世に送り出しております。また同時に日本デザインコミッティーの推進者としても活躍し、多くの建築家・デザイナーの相談役・指南役として頼られる存在でもあられます。グッドデザイン賞のあり方等についても多々助言をいただいております。本日のインタビューでは、産業工芸試験所や剣持勇さんの活動など、初期のデザイン振興に関連する状況等についてお聞きしたいと思います。

●松本哲夫氏の産業工芸試験所入所の経緯

—— まず、松本さんがデザインの世界に入られた時代は、建築系とデザイン系は、日本ではまだまだ距離が離れていたことと思います。今では建築を学び様々なデザイン分野で活躍されている方も多いのですが、80年代頃までは、建築家とデザイナーは別の世界の住人といった感じであったかと思います。新制大学として改組された千葉大学で建築を学ばれた松本さんは、なぜ産業工芸試験所に入られたのでしょうか。

剣持勇は米国に2回も続けて視察に行きました。1952年（4月-11月）と53年（6月-8月）です。米国に行ってデザインの調査をしてはじめてわかったのが、工業デザイナーもグラフィックデザイナーもいるんだけど、イームズにしてもネルソンにしてもそうですが、デザイナーはみんな建築出身らしいということです。ファニチャーもインテリアも建築の素養がないとだめだと、米国に行って理解したわけです。それで彼は帰国して産業工芸試験所（産工試）にも建築出身者がほしいと考えたようです。

そこに、たまたま千葉大学建築学科の卒業間近にもかかわらず、どこにも就職口が決まらない私がいいたわけです。1953年3月のことでした。私は建築の設計者になりたくて千葉大学の建築学科に入ったわけで、それで卒業を控えてあちこちの建築設計事務所を必死に走り回ったんですけど、どこも採ってくれなかったんです。

2～3年前であれば、朝鮮戦争（1950年6月～53年7月（休戦））の最中で、日本は安全でしたから、米軍

の将校や下士官が来るときは必ず家族連れで来るわけで、米国からは東京近辺にアメリカ人向けのモダンデザイン住宅を要求され、それを国がバックアップしていました。日本の建築家はその頃はそんな大きな住宅を設計する機会はないわけだから、みんな喜んで設計をしたわけです。だから私の大学の先輩にあたる東京工業専門学校(東京工専)(*1)の建築を出た人も、みんなそういう設計事務所に入っていたんです。仕事がたくさんありましたから。

ところが私が卒業する年には、朝鮮戦争は終結に近づいており、そういう建築需要は無いわけです。だから先輩のいる事務所を訪ねてみましたが埒が明きません。そもそも千葉大学の建築学科はできたばかりで、東京高等工芸学校時代には室内計画はあったけど建築はなかったの、当時はまだそれほど建築設計事務所に大学の先輩はいないわけです。どうしようと困りはて、それで3月の半ば過ぎに大学に行ったら、先生からこういうところあるけど行って見ないかと言われました。それが産工試だったわけです。

学生時代の私は、いろいろな新しい情報が欲しかったので、外国の雑誌を片っ端から読んで勉強していました。当時大学の研究室には、1冊ずつしか外国雑誌を買う予算がなかったの、新しい雑誌が来ると教授、助教授、助手と順番に読んで、学生が読めるのは一番最後でしたけど。先生は私がそうやって外国雑誌を見て勉強してたのを知っていて、それで「ともかく俺がいまから言うところへ行ってみろ」と言うわけです。

「大学と比べたら信じられないほど予算があって情報を集めてるところがある」「そこは世界中の雑誌が毎月どんどん入ってきて見られるんだ」「ちょっとのぞきに行ってみろ」と。

それで行ったわけです、産工試へ。朝に松戸の大学で言われて、大学を出たのが10時ころで、電車に乗って下丸子まで行って、お昼過ぎくらいに産工試に着きました。それで「千葉大で言われて来ました」と言うと、「なんで今頃出てきたんだ、午前中に筆記試験をやっていたんだぞ」と言うわけです。私は会社訪問で来たんで、試験のことなんか知りませんでした。「じゃあもういいです、帰ります」と言ったら、「ちょっと待て、午後の面接だけでも受けていけ」と言われて、なにか変だなとは思ったんですよ。

それで面接室に入ると試験官は京都大学の建築出身の藤井左内さんだったんです。そこでは建築を卒業するのにどこも採ってくれないと話したこと、ドイツ工作連盟は知っているかとか聞かれたことを覚えています。それで試験は面接しかしてないのに、数日して産工試から採用通知が届きました。しかも6級職、上級職ですよ。だから親父は喜んだよね、公務員なら食い

っぱぐれないからと。それでもうほかに行くところもないから、一応産工試に行くことにしたわけです。面白そうなところだとは思ったんで。4月に産工試に行ってみると席が決まっていた、装備意匠係でした。

産工試に入ってからわかったんですけど、中学時代の1年先輩の佐藤太郎という男が産工試にいて、それで剣持が米国から帰ってきてどうしても建築出身者がほしいって言いだし、それで東京工専の建築出身の佐藤は母校に行つて誰か探して来いと言われたみたいでした。幸か不幸か千葉大の建築学科で設計をやりたいと言っている私が売れ残っていたわけで、私のがぞいてこいと言われたときには、既に佐藤が剣持のところ私の資料を持っていったわけです。それで、これなら採ってもいいと、剣持は思っていたらしいんです。そこに私がちょうど訪ねていったということになるわけです。

ただ私も万が一設計事務所に行けないとき困るなと思ひ、一応6級職の建築職の国家試験を、後の上級職に相当しますが、その試験を受けて通ってはいました。ですからまかり間違えば役人として建設省に入っちゃったわけですよ。でも私は役人はいやだったから、産工試でちょうどよかったかなと思っています。

(*1) 大正10年(1921年)設立の東京高等工芸学校(高等工芸)は、昭和19年(1944年)に東京工業専門学校(東京工専)に改称となり、昭和24年(1949年)に千葉大学工芸学部となった。尚、工芸学部は昭和26年(1951年)より工学部となり現在に至る。

●戦時中の工芸指導所と剣持勇

—— 松本さんが産工試で仕事を始めていくきっかけには、剣持さんとの「縁」があったんですね。剣持さんは今日でも素晴らしい家具をデザインした方として語り継がれていますが、工芸指導所の所員として、研究だけでなく啓蒙といった領域でも大きな役割を果たされたと聞いております。そのような剣持さんの側面について少しお聞きしたいと思います。

戦争中に工芸の研究なんてとんでもないということで、工芸指導所(産工試の前身)(*2)は戦争中につぶされそうになったことがあったんです。ちなみに、戦争中の1944年に高等工芸が東京工専に改称となった際には、学科名にあった工芸の名称はいずれも外されるかたちで改組されました(工芸図案科は建築科に、木材工芸科は木材工業科に、など)。

そのとき、工芸指導所で研究していた成形合板技術が指導所の生き残りに寄与したと、剣持から聞いたこ

とがありました。というのは、木製飛行機に使えるということアピールしたようなんです。それにより軍に必要性を納得させられたわけで、それでつぶされずに工芸指導所は生き延びられたといういきさつがあったということです。

ノモンハン事件のとき撃墜したソビエト連邦の飛行機が木製でした。胴体から翼から一切切が木製だったということです。それに関連して剣持は、詳しくはわからないけれど彼は当時技官で商工省と同時に軍需省にも籍があったみたいで、それで軍の航空関係の偉い人のところへ行行って、その写真を見せられたときに、そういうものだったらうち（工芸指導所）の技術でつくると言ったらしいんです。彼はまたうまく喋ったんだと思うんです、当時成形合板技術を使って木製椅子など研究もしていたわけですから。

確か私も「航空朝日」という雑誌で、戦時中に航空機の座席、シートのデザインを木製でやるというのを研究していたというのを見たことがあります。それで木製の飛行機もつくれるぞっていう話をしたんだと思います。それにより彼は工芸指導所の中で脚光をあびることになったわけです。戦時中で軍需省の仕事で認められ、工芸指導所の存続させることができたわけですから。

それで彼はある時期、赤い長靴をはいて軍刀をさげて、日本中の家具屋を指導して歩いていたと聞きました。木製飛行機をつくる技術なんかあるようなないような感じだったと思いますけど。それで天童木工は戦時中には木製弾薬箱をつくっておりましたが、そういうところを順番に訪ねて技術指導をしていたようです。戦争中のことですが、そういう変わり身はうまいんだよな、彼は。成形合板技術を使って、実際の飛行機はつくらなかつたけど、おとり飛行機だとかは作って各地の飛行場に置いたということです。本物の飛行機はどこかに避難させて、敵機の射撃で燃えちゃっても木製のおとり飛行機ならすぐつくり直せたということです。そういう話をいろいろなところから、天童木工からも聞いたことがあります。

さて、戦時中の工芸指導所ですが、あまり知られていないかもしれませんがけっこういろいろな人たちが出入りしていました。勝見勝さん、小杉二郎さん、秋岡芳夫さんなども、工芸指導所に籍があったと聞いています（*3）。木製飛行機や航空機用の成形合板部品の研究をしていることが、それらは兵器にかんする研究になりますから、工芸指導所が戦時中に生き残れる理由の一つになったとお話しました。それでデザイン関係者が工芸指導所に逃げて流れ込んできたそうです。

そうしないと戦時中ですから徴用の制度があって、兵隊に行かなければ徴用工として軍需工場に引っ張ら

れて機械加工の仕事等をさせられるわけです。正職員でも嘱託でもいいですから工芸指導所で仕事があれば徴用を免れることができたわけです。当時フリーでいるなど認められないわけですから。たぶんそのような経緯もあって工芸指導所にはけっこう人材も集まったようです。剣持は木製飛行機の研究等に取り組むにあたり、そこまで読んでいたかはわかりませんが。

（*2）工芸指導所は昭和3年に仙台に設置された。昭和15年に本所を東京に移転、旧仙台本所は東北支所となる。昭和27年に産業工芸試験所に改称された。

（*3）「産業工芸指導所30年史」の職員表では、勝見勝は昭和16年～18年、小杉二郎は昭和19年～20年に、それぞれ技官職員であったことが記録されている。

●産工試の成形合板技術と天童木工

—— 剣持さんはプロモーター的な資質もお持ちだったんですね。始めて聞いた、知らなかった話が沢山出てきました。デザインの黎明期について、わからなかったピースが幾つか埋まったように思います。

ところで、剣持さんといえば「天童木工」を連想します。この会社の成形合板技術は、戦後の家具デザインを特徴づけているように思います。工芸指導所、剣持さん、成形合板技術、そして天童木工、これらの関係に、戦後創成期のデザインの一部が窺えるように思います。

天童木工は、もとは将棋駒や小さな筆筒などを作っていた職人たちの集まりで、1940年に天童木工家具建具工業組合として活動を始め、42年に有限会社天童木工製作所となり、戦時中には木製の弾薬箱やおとり飛行機などを作っておりました。だいたい天童木工はそういうもの作るためにつくった会社みたいなもので、海軍の神町飛行場（現山形空港、東根市）に近い立地条件でもありましたから。ちなみにその格納庫を設計したのが清家清さんだったとか、そういうことは剣持から直接聞きました。ただ木工技術に関していえば素人集団ですよ。

1945年に終戦を迎えますが、終戦後のある時期は、何を作っても売れる時代だったから、とはいっても東北あたりはあまりモダンなものは売れないだろうから、天童木工ではちゃぶ台や茶筆筒を作って、それで食いつないでいたようなところがありました。また進駐軍向けの洋筆筒もつくったりして、それで東京・浜松町あたりに倉庫をつくって東京市場の開拓にも乗り出していきました。

ただ、本当に優れた木工技術をもって戦争前から椅

子とかついていた職人たちは、終戦後にもとの職場に戻っていったわけです。東京深川の木工職人や秋田木工の職人などはそうですね。ただ木工の素人集団であった天童木工にとっては戦後どうしていくかは課題でした。そこに成形合板技術を植え付けたらどうなるか、剣持は考えたんだろうと思います。

それで成形合板技術が仙台の工芸指導所にありましたが、それを天童木工に移転させていくわけです。なんで移転先が天童木工になったのかはよくわかりませんが、成形合板技術といっても当時はまだ海の物とも山の物ともわからない技術だったから、たぶんほかに選択肢なかったのかもしれないですね。鳥取の方にも技術の移転先候補の木工所はあったらしいけれど、剣持も技術も仙台の指導所でしたから、行き来もしやすい天童木工に肩入れしたんだろうなと思います。戦争中には木製のおとり飛行機を作らせていた経緯もあって、天童木工の技術や可能性なども剣持は知っていたんだろうなと思います。

そして、乾三郎さんという木工技術者が剣持ともども工芸指導所で成形合板技術の向上に努め、指導所の技術もアップしていきます。また、剣持や乾さんの指導もあって、天童木工も一生懸命にやっていたから、天童木工も次第に技術力を身につけていったようです。そして、私が事務所（剣持勇デザイン研究所）に移籍した頃だったと思うけど、そのころ産工試にいた乾三郎さんが天童木工に入社して（1958年に入社、後の技術担当常務）、天童木工の成形合板技術は飛躍的によくなるわけです（*4）。新しい機械設備を導入したりもしています。あと1963年には菅澤光政さんとかも天童木工に入社して会社の開発体制も整っていったのではないのでしょうか。彼は千葉大の工業短期大学の木材工芸卒業だったと思います。

（*4）「産業工芸試験所30年史」の職員表には、乾三郎（昭和22年-33年）のほか、岩淵久男（昭和23年-33年）、櫛田芳郎（昭和21年-24年）の2名が天童木工に移籍したと記録されている。

●デザインコミッティーとグッドデザイン

—— 松本さんは今日でも「日本デザインコミッティー」に深く関わっておられますが、このコミッティーは、日本のデザインの黎明期に先駆者として大きな役割を果たしました。剣持さんは初期のメンバーであったと思いますが、その創成期のお話をお聞きできればと思います。コミッティーは誇り高いデザイナーの集団でしたから、デザイン行政や国の振興活動とは距離を置いていたと聞いています。ただ人脈的には

深い繋がりがあったと思います。ここらが興味深いところです。

日本デザインコミッティーの起源は、新制作派協会に建築部というのができたところに求められます。1949年、吉村順三、谷口吉郎、前川国夫、丹下健三、山口文象、岡田哲郎、池辺陽とといった当時若手建築家により結成され、いわゆるモダニスト系の建築家たちで、そこに剣持勇も加わるわけです。そして、剣持は52年に海外工芸事情調査を命じられ訪米し、それで翌年に今度はアスペン世界会議に日本代表として出席しちゃうわけです。アスペン会議に参加した53年に日本デザインコミッティーの会員になるわけです。

新制作派協会建築部、そのメンバーが日本デザインコミッティーの中心になるわけです。できたときは「ジャパンコミッティーオブインターナショナルデザイン」という名前でした。そのときにたぶん坂倉準三先生も加わったんじゃないかな。53年にミラノトリエンナーレへの招待が日本にも来て、その対応のために日本デザインコミッティーがつくられたんだけど、付け焼き刃では準備もままならなくて、翌54年のトリエンナーレへの出展は断念したと聞いています。

それで剣持は53年に産工試に辞表を出したんじゃないかな。ただすぐに辞職というわけにはいかず、54年には日本ユネスコ国内委員会調査員に任命されたことなどもあり、それで55年6月に産工試で辞職を承認されました。私が産工試に入所するのが53年で、だから産工試では2年間だけ剣持と一緒にしたことになります。それで私が産工試に在職していたことなので、トリエンナーレには間に合わなかったという話は私も覚えています。それで次の機会、57年のトリエンナーレには日本は出展すると決めたと聞きました。そのとき集まったメンバーで準備を始めました。この流れが1960年のWoDeCo（世界デザイン会議）にもつながるわけです。そこまではかなり間がありますけれどね。

なぜ剣持は独立を考えてはじめてかということ、当時剣持はもう意匠部長だったでしょう、次は所長しかないわけで、それでそろそろと考えていたんだと思います。彼は米国調査に2回も続けて行っちゃったから、向こうのデザイナーはどんな生活しているかも知ることになるし、友達もいっぱいできたはず。米国では国が建築家を支援しているわけではなく、米国では米国の建築家協会が自分たちで試験をして資格認定していました。インテリアデザイナーについてもそうだし、グラフィックデザイナーも同じ仕組みでした。国は専門職の資格認定に関与していないわけで、それは私も正しいと思いました。

それで剣持は帰国してから、自分は公務員、即ち国の人間・職員じゃないですか、デザイナーとしての将来を考えるなかで、それについて疑問を持ったんじゃないかと思うわけです。既に産工試では意匠部長であり、やるべきことはやったという思いもあったとは思いますが。こんなこともありました。JIDA の設立にも剣持は産工試の部長として協力しましたが、いざできちゃうとそこに役人が入ってるのはおかしいとか言われて、結局組織から出て行くことになるわけです。インテリアデザイナー協会のときも似たようなことを言われたんじゃないかな。そんなことも産工試退職に影響したかもしれません。

それはともかく、コミッティーの活動が一番社会とリンクしていたのはいつごろかと考えてみると、グッドデザインを選んでいたときかなと思います。1955年の秋からですね。既に柳宗理さんや渡辺力さんとかが白木屋をベースにやっていたし、丸善でもやっていたわけですが。松屋のデザインコーナーでさっき言ったメンバーがみんな集まって始めたわけです。岡本太郎さんも清家清さんもいたし勝見勝さんもいた。だんだんと世代は交代していくわけですが、ある時期まで総括的に引っ張っていったのは工芸指導所にもいた勝見勝さんでした。

国のグッドデザイン制度創設に携わった特許庁の高田忠さんとかとは、剣持はあまり接点がなかったかもしれません。特許庁の高田さんとかは行政官でデザイナーではなかったことも関係したかもしれません。一方、コミッティーのメンバーはというと、一部評論家も含まれていましたが、基本はみんなデザイナーでしたから。

●デザイン行政のはじまりと当時のデザイン概念

—— 黒田と青木は、いま日本のデザイン行政と振興政策についての文献資料を集め、「アーカイブ」を公開し、研究を続けています。通産省がデザインの発展に一定の役割を果たしたことは、肯定的に評価すべきだと思いますが、その一方で、デザインの総合性といった視点から見ると、建築は建設省、デザインは通産省といった区分を突破できなかったことで限界があったように思います。また役所には、民間の成果を後追的に刈り取ろうとする傾向があります。松本さんは、行政からは距離を置いておられたと思うのですが、デザイン行政が始まった50年代後半から60年代にかけての動向を、どのようにご覧になっていましたか。

1957年に国のグッドデザイン制度が始まり、1958年に通産省にデザイン課が設置されました。当時私はどう感じたかという、国がデザインの善し悪しに口を出すこと自体がおかしいんじゃないかと。技術論ならわかるわけですよ。例えば建築では一定の安全基準をクリアしないと万が一のときに人間の生命にかかわるわけですから、木造だろうと鉄筋だろうと最低限の基準は必要になります。

それに対して、デザインは一人一人のデザイナーなり担当者の個性によるものだと思うんです。だから、国とか公の機関の立場で最低限の基準はあっていいですが、あまり立ち入って細かく決めてしまうと新しいものつくれなくなっちゃうと思うんです。日本だと戦前戦中の記憶もあるから、国が出てくるとあれこれ細かく決めてしまう可能性を否定できません。統制型でも言うんでしょうか。当時、そう考える人はけっこう多かったと思います。

その当時、デザインはどう理解されていたかという、例えば剣持も表面的な問題だけではないと考えていたと思います。建築の一部と思っていたようなところもあります。デザインプロパーと話していると、デザインを先にこうだからと決めて、どうやって実現するかを考えるという手順もあると聞きますが、私は建築出身だからかもしれませんが、建築は建設技術を知らない設計できないから、だからファニチャーでも製作方法を知らない、自分に作れなくても現場をマスターしないとデザインできないと思っていました。デザインプロパーの人たちとは発想が逆なんですね。

海外に目をやると、デザインというのはアメリカの概念、ビジネスから生まれた概念だったと思います。米国では職業的にも確立されており、現実に建築の仕事から離れてデザインは存在しておりました。それに対して、欧州では違って、例えばドイツではデザインという用語は使いませんでした。というかデザイナーという名称は断固として認めなかったようなところがありました。建築家、アーキテクトがデザインもするわけです。ただ欧州でも、イギリスのCoIDのようにデザインの用語が使われていた例はありました。

剣持が米国調査で仕入れた情報によれば、インテリアに関してはインテリアデザイナーではなくインテリアアーキテクトという呼称が一般的で、ベースはやっぱり建築だったという理解でした。彼は米国でクランブルック美術大学を訪ねていますが、建築家のサーリネンが創設した美術大学ですが、イームズもネルソンもその建築出身だったということです。ただ、いま考えるとそれとは別にアートセンター系の人脈もあったのかなと思います。

時代は下りますが、デザインをめぐるこんな議論

があったことを付け加えたいと思います。1987年にインテリアプランナー制度が発足しましたが、検討段階で建設省に呼ばれたら、最初はインテリアデザイナーの資格をつくりたいと言ってたんです。それで私はその時、既にインテリアデザイナーはたくさんいるわけで、後追いで国がどうこうするのはおかしい、困ると言ったんです。デザイナーというと、デザインの善し悪しの話になるわけです。国がそれをどうやって決めるんですか。建築でも建築士の試験はありますが、それは建築家の試験じゃありません。デザイナーは建築家と同じなんです。

ただ、構造設計とか配線設備施工とか建築の素養をもったインテリアデザイナーを養成するのならばいいだろうと、僕は賛成いたしました。デザインは国の評価になじまないけど、計画学ならチェックできるじゃないですか。プランニングは技術ですから。そして、そういう素養を持っていれば建築的におかしなインテリアはできないでしょうから。それでインテリアプランナーになったんです。

——インタビューを終えて（青木） 今回のインタビューでは、まず剣持勇さんに焦点をあてて臨みました。剣持さんをデザイナーとして理解するだけではなく、デザインの黎明期を牽引した一人のリーダーとして受けとめるべきではないかと考えていたからです。松本さんから、「赤い長靴で軍刀を下げて」といった剣持さんの戦時中の活躍の様子を伺うことができました。おそらく剣持さんは、周囲の人達を巻き込んでいく「台風の眼」のような存在ではなかったかと想像します。剣持さんだけでなく、亀倉雄策さんや時代は少し下りますが栄久庵憲司さんなど、黎明期には「磁力をもった人」が何人か登場します。というか、個性的で魅力的な個人が活躍できたから、デザインは黎明期を迎えることができたと理解すべきかも知れません。

もう一つ、デザインの黎明期を巡る「人のつながり」が、インタビューを通じて理解できたように思います。なぜ戦争中の工芸指導所に次世代のデザインを担う人材が集まっていたのかという疑問をもっていました。本日のお話から、これは「徴用逃れ」という言葉で素直に理解できました。そして、創成期のデザインを担った建築家たちについてです。モダニズム系の建築家であることは名前からわかりますが、「新制作派協会の建築部門」と聞いて、これも合点がいきました。

調べてみると、新制作の建築は1969年に「ス

ペースデザイン部門」と名称を変更していますが、そうした予兆は発足当初からあったのではないかと推測します。「徴用逃れ」も「新制作派」も、辞書を引いただけではわからないニュアンスがあります。そうか「彼らはモダニストなんだ」と理解することで、デザインの歴史を日本の近代史の中に位置づけていくことが出来るように思います。

松本さんは、栄久庵さんと同い年で、「磁力をもった世代」に属しています。ただ松本さんは、ギラギラした磁力ではなく、建築出身らしく理性的な磁力に満ちた方であるように感じられます。それゆえに、建築とデザインを橋渡しして、人を結びつけ育てていく役割を、さり気なく果たされたのではと思いました。

（文責：黒田宏治）

【参考1】天童木工の主な流れ（1940年～50年）（「天童木工50年史」より、黒田が編集）

1940年：戦争の激化に伴い、近郷10カ村の職人により共同作業所をつくり、天童木工家具建具工業組合として活動を始める。組合は、物資の不足から材料の調達に事欠き、県に指導により組合を結成した。

1941年：陸軍省および海軍省の指定工場となり、弾薬箱など軍需品生産に励む。

1942年：国の企業整備令に基づき、営利会社として積極的に企業規模拡大のため、有限会社天童木工製作所として、事業の一切を継承した。

1943年：飛行機用成形合板の操縦桿及び翼の骨組（練習機用）などの軍用機の機体部品を生産する。

1944年：大山不二太郎が天童木工社長に就任。商工省工芸指導所技師兼軍需技師・剣持勇が木製飛行機の部品製造指導のために来社。

1945年：G1型飛行機（おとり機）を製作し、土浦の第1海軍航空省に納入（10機）。終戦直前従業員が約150名いたが戦後は約80人になった。戦後、家具生産に切り換え、丸飯台、流し台、食品棚（3種類）など罹災地向けの家具を作り、高島屋・白木屋を通して販売し飛ぶように売れた（軍需用杉材を活用）。

1946年：東京・大田区洗足池に東京営業連絡所を設け家具販売にあたる。特需品として進駐軍向けの家具の製作を開始する。

1947年：当時100万円の高周波発振装置を購入し本格的に成形合板の実験研究に着手する（発振機の1号機は工芸指導所、2号機は天童木工製作所）。東京港区新橋烏森口営業所を設立。鈴木太郎指導による成形合板の

試作品を展示（約 50 点）、隣接の東根市神町に駐屯していたアメリカ軍将校を招待した。

1948 年：進駐軍向け家具は、この年で生産を打ち切る。家具のデザインと生産の指導を剣持勇、鈴木太郎、小林保治、中井太一郎から受ける。商工省工芸指導所東北支所の高周波木材加工講習会に天童木工が参加。

1949 年：中小企業振興工芸展覧会（東京・三越本店）に出品、剣持勇デザインの成形合板による机・椅子が中小企業長官賞を受賞。工芸指導所から技術・デザインに関する指導を受け、剣持勇らがデザインした椅子の試作を行う。

1950 年：創立 10 周年記念展示会を東京・日本橋の高島屋で開催し、成形合板による新しい家具を出品し好評を博す。5kw の大型高周波発振器を導入し、成形合板の生産が本格化する。

【参考 2】 剣持勇と産業工芸試験所及びデザイン振興活動（工芸指導所入所から 1960 年まで）（剣持勇の世界・第四分冊「その史的背景——年譜・記録」より、黒田が編集）

1932 年：4 月；商工省工芸指導所（仙台）に入所、第 1 部（木工）・第 3 部（意匠）兼務の助手となる

1933 年：工芸指導所の規範原型の研究はじまる

1934 年：豊口克平と「椅子の規範原型の研究」をまとめる（11 月、開所 6 周年記念展で発表）

1937 年：工芸指導所、成型合板の研究を始める

1943 年：11 月：商工省廃止、軍需省、農商省設置（工芸指導所は農商省に移管）／「木製航空機並びに部品の研究」（軍需省、山脇巖と協同）は、積層と成型合板とによる新しい構造の追及に成果をあげた（小杉二郎、金子徳次郎、松本文郎らの協力による）

1944 年：4 月：工芸指導所技師に任ぜらる／軍需技師兼任、航空兵器総局飛行課勤務を命ぜらる（軍需省）

1945 年：8 月：農商省廃止に伴い、工芸指導所は再び商工省に移管（敗戦後）。

1946 年：4 月：商工技師に任ぜらる。／5 月：東北支所勤務、木工課長に任ぜらる。

1949 年：2 月：新制作派協会、建築部を設置—吉村準三、谷口吉郎、前川國男、丹下健三、山口文象、池辺陽、岡田哲郎、剣持勇ら

1950 年：2 月：研究部第一課長に任ぜらる／51 年 4 月：技術部第一技術課長に任ぜらる

1952 年：3 月：海外工芸事業研究のためアメリカ合衆国へ出張を命ぜらる／4 月：工芸指導所は産業工芸試験所と改称、意匠部長を命ぜらる／10 月：日本インダストリアルデザイナー協会結成—柳宗理、渡辺力、金子徳次郎、剣持勇ら

1953 年：6 月：米国に出張を命ぜらる／第 3 回アスペン世界デザイン会議に初の日本代表として出席、同時に合衆国の工業デザインの実態を視察・調査

1954 年：6 月：日本ユネスコ国内委員会（教育文化活動小委員会）調整委員に併任

1955 年：6 月：産業工芸試験所意匠部長辞職を承認される／7 月：剣持勇デザイン研究所を設立

1957 年：7 月：ミラノ・トリエンナーレに日本初参加／10 月：財団法人日本国際デザイン協会発足—財界人とデザイナー 76 名の発起人

1958 年：9 月：通商産業省・意匠奨励審議会委員（任期 2 年）／11 月：日本室内設計家協会（後の社団法人日本インテリアデザイナー協会）理事（～1962. 3）

1959 年：4 月：日本室内設計家協会理事長（～1960）／9 月：東京オリンピック組織委員会デザイン委員会委員（～1965. .6）／10 月：通商産業省・デザイン奨励審議会委員（～1971、但し 1961. 10. 1～1968. 3. 31 は欠）

1960 年：5 月：世界デザイン会議（産経会館ほか）／グッドデザイン・コミッティ結成、創設メンバー 丹下健三、清家清、吉坂隆生、剣持勇、渡辺力、亀倉雄策、石元泰博、岡本太郎、浜口隆一、勝見勝、(アドバイザー：坂倉淳三、前川国夫、ペリアン)

【参考図書】

1) 《剣持勇の世界》編集委員会編『その史的背景——年譜・記録（《剣持勇の世界》第四分冊）』河出書房新社、1975 年

2) 天童木工五十年史「近代デザイン年譜」編集委員会編『近代デザイン年譜 天童木工五十年史』天童木工、1993 年

3) 工業技術院産業工芸試験所編『産業工芸試験所 30 年史』産業工芸試験所 30 周年記念事業協賛会、1960 年

4) 菅澤光政『天童木工』美術出版社、2008 年

5) 森仁史編『ジャパニーズ・モダン 剣持勇とその世界』国書刊行会、2005 年

6) 日本デザインコミッティー監修『デザインの軌跡 日本デザインコミッティーとグッドデザイン運動』商店建築社、1977 年